

日本語教育のための外来語アクセントの 65年間の変化のパターン調査*

李 香 蘭**

(e-mail : ran96@wku.ac.kr)

<目 次>

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1. はじめに | |
| 2. 研究対象と研究方法 | 4.2 逆平板化 |
| 3. 外来語アクセントの原則 | 4.3 -3型への変化 |
| 4. 変化のパターン | 4.4 元に戻ったパターン |
| 4.1 アクセントの平板化 | 4.5 頭高型への変化 |
| 4.1.1 完全な平板化 | 4.6 その他の変化のパターン |
| 4.1.2 第1アクセントの平板化 | 5. おわりに |
| 4.1.3 第2アクセントの平板化 | |

キーワード：アクセントの平板化(Heiban of accent), 原語アクセントの影響(Impact of English accents),
-3型への変化(Changing of accent -3type), 第1音節のアクセント(Accent of the first syllable),
音韻的な要因(The cause of phonological)

1. はじめに

最近日本語の話しことばにおいて「さようなら」が「さよなら」に「寝られる」が「寝れる」「三階(さんがい)」が「さんかい」などに変化しつつある。アクセントも例外ではなく、時代と共に変化がかなり見られる。日本語のアクセントの変化については、これまで相沢(1984・1991)、最上(1984)、佐藤(1990)などいくつかの論考がある。外来語のアクセントの変化を中心とした纏まった論文は拙稿(2000)のほかに管見に入っていない。外来語は母語にも同じ語が存在しているため、発音しやすいと思いがちであるが、特殊拍の発音の難

* この論文は2016年度円光大学校内研究費支援により助成された。

** 円光大学日本語教育学科教授、日本語教育・日本語音声教育専攻

しさを決まったアクセントのルールが存在しているため、余計に発音に難しさを感じさせる。外来語の難しさについては拙稿(2016)でよく現れている。それに外来語のアクセントも時代と共に変化が著しい。そこで、韓国人の日本語学習者には外来語アクセント教育は必要である。このためには、外来語アクセントの変化のパターンや変化の要因を検討することは非常に重要であると思われる。拙稿(2000)はNHKが1998年、13年ぶりに4回目の大改正行なわれる時点で年代の異なる4つのNHK編『日本語発音アクセント辞典』と『大辞林』を用いて変化の様相を調べた。本稿では、2016年5月に18年ぶりに改訂され「新辞典」として刊行されたので、年代の異なる5つのNHK編アクセント辞典¹⁾のみを用いて、日本語の外来語アクセントの変化のパターンを調べて、その変化の要因を分析・検討する。

2. 研究対象と研究方法

研究対象と研究方法は拙稿(2000)と同様に、対象語は1951年版(以下51年版に略す)記載されている外来語1907語であるが、拍数に変化の見られる60語と複合語245語と一緒に扱うには問題があり、ここではこれらを除いた1601語のみ研究対象とする。表記に変化のある語は2016年版²⁾に従う。51年版に記載している外来語がそれ以後の版に一カ所でもない語彙は変化した例から除外した。(例:ズルチン①①→①→①①→①①→×)。

3. 外来語アクセントの原則

外来語アクセントはまったく任意というわけではなく、一般に認められるある程度の規則性が見られる。本稿では複合語は除外したので単純語の原則³⁾だけ述べることにする。

1). 3拍語以下

原則として頭高型である。ただし、特殊な拍で終わる3拍語には中高型が見られる。

1) NHK編『日本語発音アクセント辞典』(1951年版、1966年版、1985年版、1998年版、2016年版)

2) NHK編『日本語発音アクセント新辞典』2016年版は以下、016年版に省略して表記する。年代の異なる他のNHK編辞書も同じように表記する。

3) NHK編(1998)『日本語アクセント辞典』所収の、秋永一枝「共通語のアクセント」 pp.186-187参照
例は拙稿(2010)pp.79-81及び本稿の例からとった。

- ①型: ゴム ドル ケーキ タイプ トイレ ホテル レンズ
 ②型: ジャパン ブルー マシン(3つの例はNHK編2016年版解説編p.16参照)

2) 4拍以上の語

原則として終りから3拍目まで高い型(-3型)である。ただし、そこに特殊拍がくるときは、原則として前にずれる。

- ②型: スポーツ ブラウス ③型: アルバイト バスケット ④型: ダイヤモンド
 スポンサー② サッカー② エスカレーター④ サイクル①

3) 古くはいった語など、日常生活によく使われてすっかり日本語になりきったようなものや和製英語などは平板型になる傾向がある。

- ⑥型: ガラス コップ ジャケット バケツ アルバム キャラメル メリヤス
 バイト(アルバイト③) コンビに オフコン スモハラ セクハラ マザコン

4) 新しくはいった語でまだ日本語になりきっていないような語や、外国語に親しい人の発音には、原語に近いアクセントが使われる傾向がある。

- アイデンティティー(iden'tity)(①) テイピカル(ty'pical)(①)
 ナンセンス(no'nsense) (①) ユーモラス(hu'morous)(①)

4. 変化のパターン

分析対象語は1601語であるが、このうち、変化したのは344例調査されたが、拍数別所属語と変化語の数は<表1>の通りである。アクセントのゆれ⁴⁾のある語も分析の対象とした。変化のパターンはアクセントの平板化⁵⁾、逆平板化、-3型への変化、元に戻ったパターン、頭高型への変化、その他の変化のパターンなどに分類して分析・検討する。

<表1> 拍数別所属語と変化語

拍数	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍	7拍	8拍	9拍	計
所属語数	71	431	521	322	187	58	8	3	1601
変化語数	1	61	136	109	28	4	3	2	344

4) 「アクセントの「ゆれ」」については杉藤(1983)に詳しい。

5) 一般に「アクセントの平板化」とは、アクセントがゆれ、変化していく中で、平板型が優勢になっていくことである。(最上(1987) p.36参照)ここでは、平板化には完全な平板化、第1アクセントの平板化、第2アクセントの平板化に分類して分析・検討する。

4.1 アクセントの平板化

アクセントが平板化する理由として最上(1987)は「発音の容易化・頻繁に使われている専門分野の用語」などを挙げているが、本稿でも平板化の例を分析してみると昔から日本語に入って日常生活に頻繁に使われている語や語形の面からは宿約された語や原語で「～ing」で終わる語などが目立っている。坂梨(1990)では大学生の間では「サークル、スピーカー、レポート」などの語⁶⁾が平板化になることが多いと指摘している。また井上(1992)や放送研究部(1987)も業界用語や専門分野の用語は平らになる傾向があると述べている。

アクセントの平板化は日本語全体の傾向で、外来語も例外ではなく、変化のパターンの中では一番割合が高く調査された。この数は変化した例344語のうち、完全な平板化⁷⁾82例、第1アクセント⁸⁾の平板化⁹⁾24例、第2アクセントの平板化⁹⁾37例、総143例現れ41.6%も占めている。

4.1.1 完全な平板化

このパターンは82例が見られたが、3拍語19例、4拍語40例、5拍語以上の語23例で、4拍語の平板化が一番目立っている。また1951(以下51)年版から1966(以下66)年版までのアクセントの変化が多く現れ、年代が最近になればなるほど変化が少ないのが特徴である。拍数の面では4拍語の変化が目立つ。完全な平板化は85年版から多く現れている。完全な平板化は<表2>のように新しい版になればなるほど変化が比例的に減少されている。

<表2> 完全な平板化

出版年度	3拍語	4拍語	5拍語以上	変化の数
51→66年版	16	31	16	63
66→85年版	10	27	10	47
85→98年版	7	7	8	22
98→016年版	3	1	3	7
合計	36	66	37	139

<3拍語>

インクink ①→①○→①○→○①→○

6) 85年版には「サークル①、スピーカー②、レポート②」と記載されている。

7) ここで「完全な平板化」とはゆれがなく、016版で完全に○に変化した例のことを意味する。

8) 「第1アクセントの平板化」とはアクセントのゆれのある語の中で第1のアクセントが平板型へ変化した例を指す。

9) 「第2アクセントの平板化」とはアクセントのゆれのある語の中で第2のアクセントが平板型へ変化した例を指す。

- パイプ pipe ①→①○→○①→○①→○
 バトンbaton ①→①○→○→○→○
 フライfly, fry ②○→○②→○②→○→○
 ベルトbelt ①→○①→○→○→○
 ボールball, bowl ○①→○→○→○①→○
 メダルmedal ○①→○①→○→○→○

計19例

3拍語は431語のうち61例変化したが、19例が完全な平板型に変化し、これらの例の多くは51年版には外来語アクセント原則である「-3型(①)」または平板型(○)とのゆれのある語が最新版である016(2016)版には○に変化した例である。「インクink ①→①○→①○→○①→○」のように徐々に完全な平板化に進んでいる例が目立つ。016年版の変化例は「インク、パイプ、ボール」3語である。

<4拍語>

- アマチュアamateur ②→○②→○②→○→○(ブロンズbronze¹⁰⁾)
 アルバムalbum ①→○①→○→○→○(バーテン(bartender), パトロンpatron)
 サンドルsandal ○①→①○→○①→○①→○
 スタジオstudio○②→○②→○→○→○(スピードspeed, タピオカtapioka, プレートplate)
 ダイアルdial ①○→○①→○→○→○(ハードルhurdle, バランスbalance, フィールドfield)
 トランス(transformer)○②→○→○→○→○(ニコチンnicotine, コバルトcobalt)
 ハンドルhandle ○①→○①→○→○→○(バウンドbound, レッターretter)
 ハンスト(hunger-strike) ①→①○→○→○→○
 パテントpatent ○①→○→○①→○→○
 ファーストfirst ①○→①○→○→○→○
 プライドpride ②→②○→○→○→○
 マニキュアmanicure ②①→②○→○②→○→○

計40例

4拍語は総数521語のうち136例変化したが、完全な平板化は目立ち、40例も見られた。85年版から平板型に変化した例が多く、31例も見られた。「アルバム、サンダル、ダイアル、ハンドル」など昔から日本語に入って日常生活によく使われる語や「トランス、ハン

10) ()の中の例「ブロンズ」も「アマチュア」と同一なアクセントの変化のパターンである。以下同じである。

ト」のように和製外来語が平板型に変化する傾向がある。4拍語も年代が新しくなるほど変化が鈍化し、アクセントが定着していることが分かる。5拍語にも同様な傾向が見られる。最新版での変化例は4拍語では「サンダルsandal ①①→①①→①①→①①→①」1例しかない。

<5拍以上の語>

アスピリンAspirin ③→①③→①③→①③→①

グリセリンglycerine ③①→①③→①③→①③→①(ナフタリンNaphthalin, レントゲンRontgen)

スプリングspring(ばね¹¹⁾)③→①③→①③→①③→①(ズルファミンSulfamin)

ドライバーdriver(ねじ回し) ②→②→②→②→②

ブラインドblind ②①→②①→②①→②①→②(スライディングsliding)

プロペラーpropeller ③→①③→①③→①③→①③→①

ブランデーbrandy ②→②→②→②→②

ミーティングmeeting ①→①→①→①→①

リューマチス(rheumatism) ③→③→③→③→③

ローリングrolling ①→①①→①①→①①→①①

ナンバリング(numbering-machine) ①④→①④→①④→①④→①④

ニトログリセリンnitroglycerine ⑥→⑥①→⑥①→⑥①→⑥①

計23例

5拍語以上の語は総578語のうち147語が変化し、完全な平板化は23例見られ、このうち21例は5拍語で6拍語からは平板化は少なく変化の割合も低くなる¹²⁾。これは拍数が長い語ほど途中で切目を置きたい気持が働いているのではないか。「スプリングspring(ばね)、ミーティングmeeting、ローリングrolling、スライディングsliding、ナンバリング(numbering-machine)」など語形の面では原語に「～ing」が含まれる語が平板型になる傾向がある。5拍以上の語で、98→016年版での変化例は「プロペラー、ブランデー、ニトログリセリン」3語である。

4.1.2 第1アクセントの平板化

ゆれのある語のうち、優勢なアクセントが平板型に変化したパターンで、3拍語4例、4拍語13例、5拍以上の語7例あり、年代別のこのパターンの変化は次の表12例、12例、

11) (春)の場合③→①③→①③→①③→③である。

12) 6拍語は187語中35例、7拍語は58語中5例、8拍は7語中1例、9拍語は3語中1例のみ変化している。

13例見られたが、98→016年版には3例(プラス、オーボエ、トースト)のみ見られた。51年版には「グラタンgratin②①、セカンドsecond①①、ゼネスト(general strike) ②①、ツベルクリンTuberkulin④①」4例のみ第2アクセントの平板化の動きが見られたが、66年版から平板化の例¹³⁾が15例も見られ、85年版からは24例見られ、016年版には第1アクセントの平板化のみ24例現れた。〈表3〉のように第1アクセントの平板化は85→98年版に変化語が前の版より1語多く、98→016年版には3例しかない。

〈表3〉第1アクセントの平板化

出版年度	3拍語	4拍語	5拍語以上	変化の数
51→66年版	3	6	3	12
66→85年版	1	9	2	12
85→98年版	0	7	6	13
98→016年版	1	2	0	3
合計	5	24	11	40

<3拍語>

バルブvalve ①→①①→①①→①①→①①(ビオラviola)

プラスplus ①②→①①→①①→①①→①①

リレー relay ①→①①→①①→①①→①①

計4例

<4拍語>

オーボエoboe ①→①①→①①→①①→①①

グラタンgratin ②①→②①→②①→②①→②①

ジグザグzigzag ①→①①→①①→①①→①①

スケートskate ②→②①→②①→②①→②①

セカンドsecond ①①→①①→①①→①①→①①

ゼネスト(general strike) ②①→②①①→②①→②①→②①

トーストtoast ①→①→①→①①→①①

バックルbuckle ①→①→①①→①①→①①(フィルターfilter)

マドロスmatrosos ①→①②①→①①→①①→①①

計17例

13) 第1アクセントが平板化した例と第2アクセントが平板化した例を含んだ例。

<5拍以上の語>

シリンダーcylinder ②→○②→○②→○②→○②

トレーナーtrainer(服) ②→②→②→○②→○②

パイオニアpioneer ③→③→③→○③→○③

パッキングpacking ①→①○→○①→○①→○①

バッテリーbattery(電池) ①→①→①→○①→○①

プレミアムpremium ②→②○→②○→○②→○②

ツベルクリンTuberkulin ④○→④○→④○→○④→○④

計7例

4.1.3 第2アクセントの平板化

このパターンは37例(3拍語11例、4拍語12例、5拍以上の語14例)で、98→016年版には全体的に変化が少ない傾向があるが、<表4>のように第2アクセントの平板化は10例も見られたことや85→98年版に変化語が一番多いのも注目すべきである。このパターンは時代が経ると共に第1アクセントの平板型への変化、それから完全な平板化へ向かうことは、これまでの変化のパターンから考えれば分かるだろう。最新版でアクセントが変わった例は3拍語3例「グラス、シャフト、ワイヤ」4拍語1例「オアシス」5拍語4例「スピーカー、ドライバー(運転者)、トレーナー(人)、プランナー」である。

<表4> 第2アクセントの平板化

出版年度	3拍語	4拍語	5拍語以上	変化の数
51→66年版	4	5	1	10
66→85年版	2	6	3	11
85→98年版	4	5	8	17
98→016年版	4	1	4	9
合計	14	17	16	47

<3拍語>

グラスglass ①→①→①→①→①○(シャフトshaft, ワイヤwire)

ダイヤモンド(diamond, diagram) ①→①○→①○→①○→①○(バントbunt)

データ(data) ①→①→①→①○→①○(モデルmodel)

ドラムdrum ①②→①→①→①○→①○

計11例

<4拍語>

オアシスoasis ②①→②①→②①→①②→①①

スタートstart ②→②→②①→②①→②①

トーチカtochika ①→①①→①①→①①→①①(ピッコロpiccolo)

プリズムprism ②→②→②→②①→②①

ペーストpaste①→①→①①→①①→①①(ローラーroller)

メーカーmaker ①→①→①→①①→①①

計23例

<5拍以上の語>

スピーカーspeaker ②→②→②→②→②①

ダイビングdiving ①→①→①①→①①→①①

デザイナーdesigner ②→②→②→②①→②①(ブローカーbroker)

ドライバーdriver(運転者) ②→②→②→②①→②①

トレーナーtrainer(人) ②→②→②→②→②①

プレーヤーplayer(器)¹⁴⁾ ②→②→②→②①→②①

マネージャーmanager ②①→②①→②①→②①→②①

計14例

4.2 逆平板化

アクセントの平板化は変化語344語中、143例41.6%も占めているが、逆平板化¹⁵⁾は11例しか見られない。016年版の「ハンカチ、ビタミン、アプリケ」は第1・第2アクセントとも平板型が完全に消えている。これは、日本語アクセントの全体的な傾向であるアクセントの平板化には逆行していることが分かる。「ボタン、ビタミン、メーター」など古くから日本語に入った語で、51年版では平板型と記載されていたが、次第に外来語アクセントの原則に従う型に変化しつつある。最新版でアクセントが変化したのは「ニッケル、ハンカチ、ビタミン、アプリケ、フランネル」5例である。<表2>から<表8>まで新しい版になればなるほど変化が減っているが<表5>には66→85年版で変化が一番少ない点の特徴である。

<表5>逆平板化

出版年度	3拍語	4拍語	5拍語以上	変化の数
------	-----	-----	-------	------

14) 「プレーヤーplayer」人の場合は②→②→②→②→②でアクセントの変化がない。

15) 平板型から第1・第2アクセントが平板型ではない型に変化したパターンや平板型ではない型に変化したパターンをここでは「逆平板化」という。

51→66年版	0	4	2	6
66→85年版	0	1	1	2
85→98年版	1	2	2	5
98→016年版	0	3	2	5
合計	1	10	7	18

ボタンbutton ①→①→①→①①→①①

タンニンTannin ①→①①→①①→①①→①①

デカダンde'cadent ①→①→①→①②→①②

ニッケルnickel ①→①→①→①①→①①

パラフィンparaffin ①①→①①→①①→①①→①①

ハンカチ(handkerchief) ①①→①①→①①→①③→③

ビタミンVitamin ①→②①→②①→②①→②

メーターmeter ①→①①→①①→①①→①①

アップリケapplique ①→④①→④①→④③→③④

フランネルflannel ①→①→①→①②→②①

ポインターpointer ①→①②→①②→①②→①②

計11例

4.3 -3型への変化

-3型というのは後ろの拍から3拍目にアクセント核がある型で、外来語の大原則でもある¹⁶⁾。ただし、後ろから3拍目に特殊拍などがくるときは、原則として1拍前にずれる¹⁷⁾。51年版を基準にした場合-3型は揺れない語1446語中798語あり、後ろから3拍目に特殊拍などが来てアクセントが1拍前にずれた型-4型343語を含めると外来語の大原則に当てはまる語の割合はもっと高くなる。-3型への変化は45例12.8%(3拍語18例、4拍語5例、5拍以上の語22例)で調査された。このパターンは<表6>のように新しい年になればなるほど変化が減っている。51→66年版には変化例は26語あったが、98→016年版には3例「レモン、マスコット、トロンボーン」しかなかった。

このパターンの特徴は初めの頃は原語アクセントを生かす傾向と外来語アクセント原則に従う傾向(-3型)が併存していたが、段々原語アクセントの意識が薄れて-3型に定着していることである。また-3型への変化は4拍語が非常に少ない点(5例)であるが、これは4拍語

16) -3型の例として「②型: スポーツ、ブラウス ③型: アルバイト、バスケット ④型: ダイヤモンド」

17) -4型の例として「スポンサー②、サッカー②、エスカレーター④、サイクル①」

の平板化が多い¹⁸⁾ことと関わりがある。また6拍語以上の語は変化が全部37例あるが-3型への変化が11例もあるのは特徴的である。4.6のゆれている語を含めるとこのパターンの例はもっと多くなる。この現象は6拍語以上の語になると途中で切目を置きたい気持ちが働いた結果によるものであろう。

<表6> -3型への変化

出版年度	3拍語	4拍語	5拍語以上	変化の数
51→66年版	10	2	15	27
66→85年版	8	2	3	13
85→98年版	1	1	8	10
98→016年版	1	0	2	3
合計	20	5	28	53

<3拍語>

- カヌーcano'e ①②→①→①→①→① (ドラマdrama, ブラシbrush, プランplan)
 スリルthrill ②①→①②→①→①→①(プリン(pudding))
 デビューdebut ①②→①②→①②→①→①
 トマトtoma'to ①②→①②→①→①→①(トリオtrio, ドリルdrill, ドレスdre'ss, ポテトpota'to)
 レモンlemon ①○→①○→①○→①○→①

計18例

<4拍語>

- スクリュースcrew ②③→②③→②→②→②(ストローstrow)
 ヒロイン ②①→②→②→②→②
 ラケット ②①→②①→②①→②→②
 リベットrivet ①→②→②→②→②

計5例

<5拍以上の語>

- クリスマスchri'stmas ③②→③→③→③→③(プログラムpro'gram)
 チョコレートcho'colate ③①→③→③→③→③(バリケードba'rri'cade)
 マスコットmascot ③①→③①→③①→③①→③
 アスパラガスaspa'ragus ④③→④③→④③→④→④
 スポーツマンspo'rtsman ②④→④→④→④→④

18) 4拍語521語中139例変化したが、このうち平板化は70例(第2アクセントの平板化17例含む)調査された。

セールスマンsalesman ④①→④①→④①→④→④
 トロンボーンtrombo'ne ②→②→②④→④②→④
 プラスチックpla'stics ④②→④②→④②→④→④
 セクショナリズムsectionalism ④→⑤→⑤→⑤→⑤
 ハープシコードharpsichord ①⑤→⑤→⑤→⑤→⑤

計22例

4.4 元に戻ったパターン

このパターンは「エプロン、パラソル①→①①→①①→①①→①」のように016年版のアクセントが51年版に戻った例である。このパターンは48例(3拍語6例、4拍語22例、5拍語以上の語20例)調査された。これらは原語アクセントの影響をうけた型に戻った例「シェパード、マホガニー」や平板型に戻った例「ザボン、ボーイ、ゼラチン」、アクセント核を前にずらす要因が働いた型に戻った例「リエス、ニュアンス、コスモス」、-3型に戻った例「トラブル、モチーフ、アンパイヤ」、原語に多い第1音節にアクセント核を置く傾向に戻った例「マーガリン、マーケット」などが調査された。〈表7〉にも新しい年になればなるほど変化が鈍くなっていることが分かる。

〈表7〉元に戻ったパターン

出版年度	3拍語	4拍語	5拍語以上	変化の数
51→66年版	5	20	14	39
66→85年版	4	11	12	27
85→98年版	1	10	9	20
98→016年版	2	3	6	11
合計	12	44	41	97

〈3拍語〉

キャビネcabinetre ①①→①①→①①→①①→①①
 ザボンZambon ①→①①→①①→①①→①
 シチューstew ②→②①→②①→②①→② (*②①①?/②①新明解ア)
 パンヤpanha ①→①①→①→①→①
 ヒットhit ①→①③→①→①→①
 ボーイboy ①→①①→①→①→①

計6例

<4拍語>

- エプロンapron ①→①○→①○→①○→①(パラソルparasol)
 カリエスkaries ①→①②→①→①→①(セロハンcellophane, ニュアンスnuance)
 コスモスコ'smos ①→①○→①○→①→①(ネーブルnavel)
 シェパードshe'pherd ①②→②①→②①→②①→①②
 シャンソンchanson ①③→③①→③①→①③→①③
 ゼラチンgelatine ○→○②→○②→○→○
 デュエットduet ①→①②→①②→①→①
 ヘリウムHelium ②→②①→②①→②→② (モチーフmotif) 計22例

<5拍以上の語>

- アンパイアumpire ③→③○→③○→③○→③
 サントニンSa'ntonin ○①→③①○→①○→○①→○①
 スプリングspring *(春)③→○③→○→○→③
 パラダイスパ'radise ①③→③①→③①→①③→①③
 ボンネットbo'nnet ③→③→③①→③①→③
 マーガリンma'rgarine ①→①○→○①→①○→①
 マーケットma'rkēt ①→①③→①③→①③→①
 マホガニーmahog'any ②→②③→②→②→②
 グラジオリスgladiolus ④③→④→④→④→④③
 トランペットtru'mpet ④→④②→④②→④→④ 計20例

4.5 頭高型への変化

このパターンの例は51年版には原則に充実な-3型や頭高型と併存していたが、次第に頭高型に定着している例である。全部15例しかないが、「シグナル、スリラー、トロフィー」などアクセント核をずらす要因である語末の「ル、ー」が頭高型への変化に影響を与えている例がある。それから「カーニバル、コンサート、チューリップ」のように原語アクセントと一致している型に定着している例や「サスペンス、タンバリン、ルーレット」のように外国語の意識が働いて原語に多い第1音節にアクセントを置く型に定着している例などがある。このような意識は5拍語でよく現れる傾向¹⁹⁾がある。原語アクセントと一致している例「カーニバ

19) 最上(1984)も「オーディオは平らにサスペンスは前へ」と5拍語の頭高型への現象を指摘している。

ル、コンサート、チューリップ」も偶然一致していて、実際は原語に多い第1音節にアクセントを置いた型である可能性がある。〈表8〉にも変化の語数が少しずつ減っていることが分かる。

〈表8〉頭高型への変化

出版年度	3拍語	4拍語	5拍語以上	変化の数
51→66年版	0	5	6	11
66→85年版	0	2	7	9
85→98年版	0	1	4	5
98→016年版	0	0	2	2
合計	0	8	19	27

シグナルsi'gnal ①①→①→①→①→①(ワクチンVakzin)

スリラーthriller ②→①②→②→①→①

トロフィーtrophy ①②→①→①→①→①

ファゴットfagotto ②→①②→①→①→①

カーニバルca'rnival ③①→①③→①③→①→①(ヨーゼットgeorgette)

コンサートco'nsert ③①→①③→①→①→①(コンセントconsert、ルーレットroule'tte)

サスペンスsuspense ③→③→①③→①→①

タンバリンtambouri'ne ①③→①③→①→①→①(バタフライbu'tterfly)

チューリップtu'lip ①③→①③→①③→①③→①

アクセサリーacce'ssary ③→①③→①→①③→①

計15例

4.6 その他の変化のパターン

このパターンは82例見られたが、ゆれている語や3.1～3.5のどちらにも入らないタイプである。このうち、ゆれている語は78例で残り4例は「コーヒー、クリスチャン、アナウンサー、チャールストン」である。「コーヒーco'ffee」は51年版のみ原語アクセントの影響が見られる①型で残りの版では③型であるが、これは音韻構造では説明しにくく、外来語全体的な傾向から見れば①型で定着すべきであろう。

「クリスチャン、チャールストン」は2語とも後ろから3拍目「ス」に母音の無声音化現象が起っているのにも関わらず、51年版には原則通の型(-3型)で記載されているが、その後は1拍前にずれた型を採って現在まで定着している。

「アナウンサーanno'uncer」は51年版の②型は原語アクセントの影響で考えられるが、

③は後ろから3拍目に「ン」という特殊拍がきてアクセントが1拍前にずれた型である。〈表9〉にも最近の版になればなるほど変化が段々減っていて、4・5拍語で変化が目立っていることが分かる。

「コニャック、パレット、フィアンセ、サフラン」などは98年版までは②が優勢な型であったが、016年版には原語アクセントの影響が考えられる①が優勢な型となっていることに注目すべきである。これは外来語の変化の傾向²⁰⁾から逆らうパターンである。

「アドバイス、アンケート、コンパクト、シガレット、シルエット」などは51年版には-3型が優勢なアクセントであったが、原語アクセントが3拍目(③)にあるにも関わらず最新版には①③で頭高型が優勢な型となっている。これは前述したように使用者の意識の問題と関わりがあると思われるが、原語に多い第1音節にアクセントが置かれている。次の例は「タブレット ta'blet、テクニックte'chnic、トイレットto'ilet、ピクニックpi'cnic、ラプソディーrha'psody」全例①→①③→①③→①③→①③のパターンで変化しているが、優勢な型は原語アクセントと一致している①型を採っている。これは偶然原語アクセントと一致していて、やはり原語に多い第1音節にアクセントを置く傾向と関わりがあるだろう。

〈表9〉その他の変化のパターン

出版年度	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語以上	変化の数
51→66年版	1	1	20	14	36
66→85年版	0	1	9	12	22
85→98年版	0	2	6	10	18
98→016年版	0	0	6	6	12
合計	1	4	41	42	88

<3拍語>

ピケPique ②→②①→②①→②①→②①

スパイspy ②→②→②→②①→②①(ズボンJupon)

プレスpress ②→②①→①②→①②→①②

計4例

<4拍語>

アイデアide'a ③→③②→①③→①③→①③

エポックepoch ①②→①②→①②→②①→②①

カポックkapok ②→②→①②→①②→①②

20) 外来語は最初は原語アクセントの影響が強いが段々-3型や平板型への変化の傾向がある。

ガレージgarage ①→①②→①②→②①→②①(チャレンジchallenge)
 コーヒーco'ffee ①→③→③→③→③
 コニャックco'gnac ②→②→②①→②①→①②(パレットpa'lette, フィアンセfiance(e))
 サフランsa'ffron ②①→②①→②①→②①→①②
 スイッチswitch ②→②①→②①→②①→②①
 スリッパslipper ②→①②→①②→①②→①②
 タラップtrap ②→②①→②①→②①→①②
 ブランコbalanco ①→①→①→①②→②①

計29例

<5拍語>

アドバイスadv'ice ③→③①→①③→①③→①③
 アンケートenque'te ③→①③→①③→①③→①③
 エキストラextra ④→④②→③②→③②→③②
 カリキュラムcu'rriculum ②③→②③→②③→①③→①③
 クリスマスChristian ③②→②→②→②→②
 コスチュームco'stume ③①→③→③→①③→①③
 コルセットco'rset ③①→③①→③①→③①→①③
 コンパクトcompact ③→③①→①③→①③→①③
 シガレットcigare'tte ③①→③①→①③→①③→①③
 シルエットsilhou'ette ③①→①③→①③→①③→①③
 ソーセージsa'usage ①→①③→①③→①③→③①
 タブレットta'blet ①→①③→①③→①③→①③(テクニクte'chnic、トイレットto'ilet、
 ピクニックpi'cnic、ラプソディーrhapsody)
 ヒステリーHyste'rie ③→③④→③→③④→①④
 ヘルメットhe'lmet ③→③→①③→①③→①③
 レジスターregi'ster ①②→ ②①→②①→②①→②①

計35例

<6拍以上の語>

アナウンサーanno'uncer ②③→③→③→③→③
 イデオロギーIdeolo'gie ③→③④⑤→③④→③④→③④
 コントラストco'ntrast ④→④①→④①→①④→①④
 チャールストンcharleston ④→③→③→③→③

デモクラシー demo'cracy ④②→④②→④→④③②→③②④

プライベート ②→②④→②④→④②→④②

サンドイッチマン sandwich-man ④→⑥④→⑥④→⑥④→⑥④

メリーゴーラウンド merry-go-round ⑥→⑥④→④⑥→④⑥→④⑥

計14例

5. おわりに

年代の異なる5つのNHK編アクセント辞典を用いて、日本語の外来語アクセントの変化のパターンを調査・分析した。1951年版に記載されている1601語中、変化した語は344例調査された。変化語を拍数別分析してみると、4拍語が136例で最も多く見られ、次は5拍語で109例見られた。3拍語は所属語数431語もあるにも関わらず、変化語は61例しか見られなかった。6拍以上の語ではそれほど変化がなかった。

変化のパターンをみると、アクセントの平板化が一番目立ち143例も見られ、その逆のパターンつまり、非平板化は11例しか現れなかったのが特徴である。最新版のアクセントが51年版に戻ったパターンが48例で、外来語の原則に戻ったパターンつまり、-3型への変化は45例、残り82例は最新版でゆれのあるパターンである。このパターンには第1アクセントのみ考えれば、-3型や頭高型への変化、音韻的な要因でアクセントに変化がある例などが当てはまる。

変化の要因は、まずアクセントの平板化は最初は外来語の原則に当てはまる型が多かったが、時代と共に外国語の意識が薄れ、また発音しやすくするために、段々平板化になったと考えられる。頭高型への変化は使用者の意識の問題と関わってくるが、原語(英語)に多い第1音節にアクセントを置く傾向と関わりがあるだろう。

【参考文献】

- 李香蘭(1996)「平板化する日本語のアクセント-外来語を中心に-」『日本文化学報』第2輯, 韓国日本文化学会, pp.51-69
- _____(2000)「日本語における外来語のアクセントの最近50年間の変化」『日本語学研究』第2輯, 韓国日本語学会, pp.221-231
- _____(2010)『일본어 음성 교육』어문학사, pp.79-81

- _____ (2016) 「日本語学習者のカタカナ語の発音知覚率」 『日本文化學報』 第68輯, 韓国日本学会, pp.237-255
- 相沢正夫(1984) 「アクセントの変化の要因」 『日本語学』 明治書院, pp.41-52
- (1991) 「アクセントと日本語教育-機能アクセント論の試み-」 『日本語学2月号』 明治書院 pp.124-131
- 秋永一枝(1998) 「共通語のアクセント」 NHK編 『日本語発音アクセント辞典』 日本放送出版協会, pp.70-116
- 井上史雄(1992) 「業界用語のアクセント」 『言語』 21(2), pp.34-39
- 坂梨隆三(1990) 「最近の外来語のアクセント」 『ぶっくれっとNO.88』 三省堂, pp.63-65
- 佐藤亮一(1990) 「現代東京語のアクセント-年齢差および辞典との差を中心にして-」 『国語論究 2 文字音韻の研究』 明治書院, pp.204-239
- 杉藤美代子(1983) 「アクセントの「ゆれ」」 『日本語学』 8(2), pp.15-26
- 放送研究部(1987) 「放送のことば -平らになる外来語のアクセント-」 『放送研究と調査』 37号 pp.36-41
- 馬瀬良雄・佐藤亮一 (1989) 「東京語アクセントの多様性」 『講座日本語と日本語教育(日本語の音声と音韻(上))』 明治書院, pp.206-232
- 最上勝也(1984) 「変わりつつある共通語のアクセント(1)オーディオは平らにサスペンスは前へ」 『NHK 放送研究と調査』 pp.72-77
- _____ (1987) 「平らになる外来語アクセント」 『放送研究と調査』 37巻10号, p.36

< 参考辞書 >

- 日本放送協会編(1951) 『日本語アクセント辞典』 日本放送出版協会 pp.1-803
- 日本放送協会編(1966) 『日本語発音アクセント辞典』 日本放送出版協会 pp.1-1096
- NHK編(1985) 『日本語発音アクセント辞典』 日本放送出版協会 pp.1-990
- NHK編(1998) 『日本語発音アクセント辞典』 NHK出版 pp.1-1007
- NHK編(2016) 『日本語発音アクセント新辞典』 日本放送出版協会 pp.1-1484
- 柴田武他(2012年版) 『新明解国語辞典』 (第七版)三省堂 pp.1-1642

논문 투고 일자 : 2017. 12. 28.
논문 심사 일자 : 2018. 01. 31.
게재 확정 일자 : 2018. 02. 05.

<要旨>

日本語教育のための外来語アクセントの65年間の変化のパターン調査

李香蘭

本稿は日本語教育のために年代の異なる5つのNHK編アクセント辞典を用いて、日本語の外来語アクセントの変化のパターンを調査・分析した。

変化のパターンをみると、アクセントの平板化が一番目立ち143例も見られ、その逆のパターンつまり、非平板化は11例しか現れなかったのが特徴である。最新版のアクセントが51年版に戻ったパターンが48例で、外来語の原則に戻ったパターンつまり、-3型への変化は45例、残り82例は最新版でゆれのあるパターンである。このパターンには第1アクセントのみ考えれば、-3型や頭高型への変化、音韻的な要因でアクセントに変化がある例などが当てはまる。

変化の要因は、まずアクセントの平板化は最初は外来語の原則に当てはまる型が多かったが、時代と共に外国語の意識が薄れ、また発音しやすくするために、段々平板化になると考えられる。頭高型への変化は使用者の意識の問題と関わってくるが、原語(英語)に多い第1音節にアクセントを置く傾向と関わりがあるだろう。

Pattern investigation of 65-year Period change of loan word accents for Japanese language education

Lee, Hyang-Ran

In this paper, we investigated and analyzed patterns of change in Japanese accustomed accents using Japanese accent dictionaries of five different NHK editions for Japanese language education.

Looking at the pattern of change, the flattening(Heibanka) of the accent was the most prominent and 143 cases were seen, and the opposite pattern, that is, only 11 cases of non-flattening(Hiheibanka) was characterized. There are 48 patterns of the latest version of the accent back to the 51st edition, the pattern returned to the principle of loan word, that is, the change to -3 type is 45 cases, the remaining 82 cases are the latest version and there is a distorted pattern. In this pattern, if only the 1st accent is considered, changes to -3 type and head height type(Atamadakagata), examples in which the accent changes due to phonological factors, etc., apply.

The factor of the change is that the flattening(Heibanka) of the accent first had many types that fit the principles of loan words but it is thought that because the consciousness of foreign languages fades with the times and it is easy to pronounce, it becomes flattened from time to time. Changes to head height type(Atamadakagata) are related to problems of user's consciousness, but there will be a connection with the tendency to place an accent on the first syllable that is often in the original language (English).